

下りエスカレーターを逆走

宇敷 辰男

子供が下りのエスカレーターを逆走し駆け上って遊ぶ様子に、顔をしかめたことがある。でもネット検索してみるとこんな比喩が出ていた。

人の成長は、何もしなければそのまま下降してしまう。今の位置から昇るには強い力で逆走し続けなければ駄目で、それは苦しいもののはず。自分が成長できず苦しいと感じたら、それは成長に向って進んでいる証である。

現役時代に時差通勤をしていた頃、乗換駅でシニア男性が下りエスカレーターを逆走して登っている所を目撃した。一体何をしているのだらうと怪訝な顔で見た。この疑問が解けたのは還暦を過ぎて仕事で青森の八戸へ出張した時だった。

その朝、東北新幹線で八戸駅に着き、コインロッカーに旅行鞆を預け、この冬一番の寒さのなか地元の大学へ向った。仕事を終えて八戸駅に戻ったのは夕方であった。

この日は「八戸えんぶり」の最終日である。えんぶりは毎年二月十七日～二十日、その年の豊作を大地に祈る祭りで、会場のある本八戸駅までローカル線で十分程である。

クライマックスの「かがり火えんぶり」の開始時間に合わせて、ホームに向い跨線橋を渡って、下りエスカレーターに乗った途端に思い出した。しまった！ コインロッカーに荷物を忘れた。一時間に一本の列車を逃がしたら間に合わない。ステップは既に下っている。咄嗟に打開策が脳裏をよぎり逆走が思い浮かんだ。でも山登りのスビードじゃ追いつかない。駆け上り途中でつまずき、両膝を打ちつけ擦りむき何とか登り切った。逆走した子供の元氣と、是非なく必死に逆走したシニア男性の心境がいま解った。

八戸市役所前の広場で始った雪の舞う幻想的な夜の豊年祭。かがり火に照らされた舞台で、若人が大漁の声を挙げて舞い踊り、親爺さんのハアーヨイヤサツの掛け声がお囃子と共に響き渡る。

シニアライフは逆走などやめて、皆に見守られて薪の炎から立ち昇る煙のように、空に向ってユックリのんびり進んでいきたいものである。